

農産FAX情報 第2号

令和4年6月1日

発行：ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

1 アブラムシ類の防除

○5月下旬にてんさい作付ほ場でアブラムシの発生が確認されています。ウイルス病を媒介するため、ほ場を確認し、多発する前に防除を行いましょ。

○秋まき小麦では、出穂後10～20日頃から穂への寄生密度が増加する可能性があります。20～25℃の高温乾燥条件で発生が増えるため、気象経過に注視しましょ。

表1 アブラムシ類の防除基準例

作物名	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
秋まき小麦	ゲットアウトWDG	4000	収穫21日前	3回以内
	アドマイヤー顆粒水和剤	15000	収穫14日前	2回以内
てんさい	コルト顆粒水和剤	4000～6000	収穫7日前	3回以内
	モベントフロアブル	2000～4000	収穫14日前	3回以内
大豆	ペイオフME液剤	2000	収穫7日前	3回以内
ばれいしょ※	ゲットアウトWDG	3000	収穫7日前	4回以内

※ ナストビハムシと同時防除が可能。

2 秋まき小麦

(1) 赤かび病防除

○止葉期は平年より6日早く、開花期も早まることが予測されます。赤かび病は開花期間中の多湿条件により多発するため、開花始期に1回目の防除を行いましょ。

○降雨が予測される場合は、開花前でも防除を前倒しするなど天候に合わせて防除を行いましょ。

○穂全体に薬剤がかかっていない場合や、発病を確認してからの散布では効果が低いです。予防防除に努め、開花状況に合わせて複数回防除を行うなど穂全体に薬剤がかかるようにしましょ。

表2 赤かび病防除を中心とした防除体系例

防除時期	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用回数	使用時期
出穂前	バラライカ水和剤	M4 3	500	2回以内	収穫14日前
前回防除 7日後	ベフトップジン フロアブル	M7 1	800～1000	3回以内	収穫14日前
前回防除 7～10日後	ミラビスフロアブル	7	1500	2回以内	収穫7日前

注：耐性菌の出現を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、系統が異なる薬剤を組み合わせましょ。

(2) コムギ縞萎縮病拡大防止

○縞萎縮病は、土壌伝染性の病害です。病土を健全ほ場に持ち込まないよう、管理作業は常に発病ほ場を最後にし、作業後は機械等をしっかりと洗浄しましょう。

2 てんさい

(1) 中耕

○中耕作業により、除草効果や地温上昇効果が期待できます。茎葉が傷つかないようにカルチを調整し、実施しましょう。

(2) テンサイトビハムシの防除

○高温少雨によりテンサイトビハムシの発生や食害が確認されています。ほ場観察を行い、発生初期に薬剤散布を行いましょう。

3 ばれいしょ

(1) ナストビハムシの防除

○成虫の発生時期は6月中、下旬ごろが最盛期となるため、ほ場観察に努めましょう。生長点付近の若葉の表裏両面を食害し、径1~2mmの円形の食害痕を残します。

○6月上旬ごろから産卵が始まり、ふ化した幼虫は地中に入ります。幼虫はストロンや根、イモを食害するため、加工用等では商品化率の低下が懸念されます。成虫を防除し、幼虫の密度を抑えましょう。

○ナストビハムシ(成虫)は、アブラムシ類との同時防除が可能です。表1を参考に発生盛期に7~10日間隔で2回実施しましょう。

農薬使用後は生産履歴への記帳を忘れずに！

農薬散布時は他作物へのドリフトに注意！

機械調整時はエンジンを止めて農作業事故防止！